

玄洋社

封印された実像

大東亜戦争敗戦後、昭和 とほ否定できない。

戦前期を暗黒時代と見なす 『玄洋社』の「母」とも
風潮のもと、『玄洋社』は 云ふべき女傑 高湯乱の縁
人脈に重なる『黒龍会』者にあたり、福岡に生まれ
と区別されるに至り、「帝 今もなお福岡に住む著者」
（『玄洋社』）と渡辺 『筑前共愛公衆会』が成立

国主義的侵略の尖兵」としは、かうした

て否定的に論じられてき

た。昭和五十年前後から竹 内好などにより再評価が試
みられてきたものへ、「そ

もそも『侵略』と『連帶』
を具体的状況において区別

できるかどうかが大問題で ある。（「アジア主義の展
望」）など歴史觀を巡る 論議に傾きながらあつたこ

の書の中心を占める『玄洋社

書』が「西日本新聞」に 発掘』が「西日本新聞」に
連載され始めたのは昭和五 神を感じるのは私だけだら
十四年のこと（）で、単行本と うか。

「実像」に迫る粘り強さ

丹念な史料調査をもとに

金 子 宗 德



玄洋社
封印された実像

石瀧豊美著

A5判・424頁・2940円
海鳥社
978-4-87415-787-9

しても増補や改題を繰り返 明治十三年五月の「玄洋社
設置御届」と同年八月の当 きたのは、筆者が掲載するべき共同体」を自掲し、既

に評者も前版の「増補版」（評者も前版の「増補版」）

玄洋社発掘（もうひとつ）

局からの許可書が写真版で 揭載された「玄洋」（昭和

十一年十月号）を発見し、

他の史料と一緒に合せて創 にばかり注がれたためで、遺ひはないのだ。

同人誌で『玄洋社』を取り 上げた際には基本文献として あげた際にには基本文献として 依拠した。そこに同 は、旧筑前国内の人々によ 对する一種の先入観を背景

じ九州人である上村希美雄 に收められた「玄洋社」員

る私設民会ともいふべき としてある。序章にあたる 名簿を見ると「有名無名合

（『玄洋社』）や渡辺 『筑前共愛公衆会』が成立 「今なお虚像がまかり通

る玄洋社」の として数へられる。この

中で手厳しい名簿は、十三種類の史

批評されてゐる中島岳志の みならず、『玄洋社』関係史跡マ

（『玄洋社』と ブル）も余所では有難い。

『黒龍会』の 『玄洋社』について論する

距離、ひいては「超國家主 べき一冊であらう。（がね

義」との距離を強調する著 してゐた。また、著者は『玄

洋社』の前身にあたる『向 ）に解放されてゐないやうで

洋社』の前身にあたる『向 に社会科学研究所主任研究員

従来の『玄洋社』研究に 陽社』が『立憲社』に匹敵 体であったことを明らかに

おいては、『玄洋社史』する有力な自由民権運動団 なかで、政治活動化して、政治

（大正六年）が十分な史料 体であつたことを明らかに た結果、確かに、昭和十年

批判のないまゝ利用され、 する。明治十年前後の福岡 残念だ。しかし、昭和十年

創立時期も明治十四年二月 は、高知と並ぶ自由民権運 代の『玄洋社』は、親

であるとの通説が流布して 動の有力な拠点であった。 総團体化して、政治活動化 した。しかしながら、昭和

きた。これに対し、著者は 維新運動の担い手たちが頭 目と虫の目で見られる部

一次史料を専門とする由で、 社』へといふ思想的系譜が

を意識してゐたことは否定 四九（昭和24）年生。